様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１２６０５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０４２５

研究課題名（和文）言語における類像性の構造と役割：音象徴・オノマトペ・詩的言語を中心に

研究課題名（英文）Structures and functions of iconicity in language: sound symbolism, mimetics, and poetical language

研究代表者
篠原　和子（SHINOHARA, Kazuko）

東京農工大学・工学（系）研究科（研究院）・教授

研究者番号：００３１３３０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：　初年度に、国際類像性シンポジウムを分担者の所属する立教大学で開催し、欧米を含む諸国から100名近い参加者を迎えて討議を行った。二年目にその成果をオランダの学術出版社から英文論文集として刊行、類像性研究の国際的展開の最先端を世界に公表した。
　三年間を通じて、音象徴・オノマトペ・詩的言語の三本の柱に沿って代表者、分担者がそれぞれ協力者とともに研究を進め、言語の類像性の構造と機能について従来の成果をさらに押し進める応用的研究を行った。特に音象徴の身体的基盤については体育学との学際研究に発展させたほか、オノマトペの使用について実験研究も採り入れ発展させた。

研究成果の概要（英文）：In the first year, the members of this project hosted the 9th International Symposium on Iconicity in Language and Literature at Rikkyo University. The outcomes of the symposium were edited and published as an anthology from a European publisher.
Through the research period, each of the members and collaborators carried out extended studies on the three main themes: sound symbolism, mimetics, and poetical language. Shinohara extended the study on physical motivations for sound symbolism to the use of iconic expressions in coaching situations in sports training, with cooperation of experts of sports science. Akita employed experimental method to investigate uses of mimetics. These applied studies were presented at conferences and/or published in papers.

研究分野：言語学

キーワード：認知言語学

１．研究開始当初の背景

本研究課題を開始した 2013 年は、「現代言語学の父」と呼ばれる Ferdinand de Saussure の没後 100 年に当たる年であった。Saussure が言語の第一特性とした言語記号の恣意性は、この 100 年のあいだに言語学の発展に大いに寄与したが、言語の恣意性と非恣意性の理論的考察は充分でなかった。本課題では、非恣意性の主要な例である「類像性（iconicity）」を言語・思考・芸術などの基盤のひとつと考え、言語の恣意性と非恣意性の関係を理論的に整理し直すことを目標として、類像性の諸側面の実証的研究を開始した。

言語の非恣意的（有契的）側面は 1970 年代前後より認知科学、認知言語学等で本格的に議論されるようになったが、これはカテゴリー構造や基本語彙構造などが中心で、いわば世界分節の仕方の恣意性であった。また文法、構文研究でも類像性に基づく分析が行われたが、「能記と所記の関係の恣意性・非恣意性」は言語学において理論的に反省されることが少なかった。一方、Sapir、Köhler らを汲む音象徴研究の流れは、言語音とイメージの非恣意的関係の解明に貢献し、「ブーバ・キキ効果」の確認を契機に、脳神経学、医学、進化心理学など多くの分野で注目されるようになった。こうしたなか、類像性研究は近年国内でも発展し始め、日本のオノマトペ研究は 1990 年代から急激に増加したほか、認知科学、人工知能などの隣接分野でも活発に研究が行われている。この現状をふまえ、類像性研究を言語学の中心的課題のひとつと位置づけるとともに、他分野との連携を含めて言語学がこれを主導し活性化してゆけるよう、研究の基盤を確立することが重要であるとの認識から、本課題を開始した。

２．研究の目的

3 年間の研究計画により、言語の類像性が表れる側面として特に「音象徴」「オノマトペ」「詩的言語（文学）」の 3 項目に注目し分析する。

期間内に、それぞれ以下を明らかにする。(1)音声・音韻を場として現れる類像性として、音象徴の身体的動機づけについて研究を発展させ、音象徴の現れる領域の広がりを明らかにする。(2)複数の言語のオノマトペ構造の分析を発展させ、類像性が及ぶ言語の範囲を、語彙・形態・統語など文法的側面から明らかにする。(3)詩歌などの文学・芸術作品の表現にみられる類像性を分析し、言語の機能・役割と類像性の関連性について考察する。

３．研究の方法

(1) 平成２５年度

初年度に当たる２５年５月に、かねてから準備を進めていた国際類像性学会（9th International Symposium on Iconicity in Language and Literature）を立教大学で開催し、国内外の類像性研究者との交流、情報交換を行い、３年間の研究の推進および国内外の研究活性化のための土壌の充実を図る。類像性研究で国際的に活躍している研究者、Anne Freadman（メルボルン大学教授）、Winfried Nöth(サンパウロ・カトリック大学教授、カッセル大学名誉教授)、大堀壽夫(東京大学准教授)を招待講演者として招聘する。

研究の本体をなす３項目（音象徴の身体的動機づけ、オノマトペの通言語的構造と特性、詩的言語の構造と特性）の研究は、研究代表者、研究分担者、研究協力者が組織的に分担しつつこれを行う。音象徴については、代表者が個別現象について実験的手法によりある程度の知見の蓄積を持つが、初年度は研究協力者（川原繁人）とともにこれを拡大・整理しつつさらに実験研究を行い、身体的動機づけについての考察を進展させる。研究分担者の秋田は、オノマトペの類像性の分布と形態・統語論的特性に関する通言語的研究に着手しており、初年度はこれを他の言語にも拡大するとともに、普遍的／個別的構造特性について考察を進める。研究分担者の平賀は、俳句等の詩的言語のテクストや表記などに見られる類像性について研究成果を有するが、これをさらに拡大し、研究協力者（山田悠介）とともに小説などにも応用して知見の蓄積とさらなる考察を行う。これらの成果は、各々国内外の学会で発表する。

(2) 平成２６年度

２６年度には、３項目の研究をさらに推進する。代表者と協力者（川原）は身体的動機づけを考察するにあたり、調音音声学的説明・音響音声学的説明の評価と比較を行い、それらの理論的妥当性について検討する。また、知覚的イメージ以外の領域への音象徴の拡張について実験的に事例研究を進める。オノマトペについては秋田が引きつづき担当し、コーパス分析などの研究手法を充実させるとともに、統計的手法によるオノマトペの構造分析の方法論確立を含めて通言語的研究を推進する。詩的言語については、平賀が協力者（山田）とともにさらに範囲を広げて分析を進め、言語の記号的構造と文脈、談話構造の関連性を含めて分析する。これらは成果が上がり次第それぞれ国内外の学会等で公表することによりフィードバックを得、その後の研究に生かす。

(3) 平成２７年度

最終年度には、２年間の研究成果を総合し、言語の恣意性と非恣意性についての理論化を全員で検討する。

４．研究成果

本課題以前より準備を進めていたオノマトペ研究の学際的和文論文集を、平成２５年４月に、協力者（宇野良子）と共編著で出版した。続いて２５年度５月に、計画通り国際類像性学会を立教大学にて開催した。そこでは 3.1 に記載した２名の招待講演者を招聘し、三日間にわたり、研究発表、パネル会議を行

った。学会後、発表論文のうち質の高い研究を集めたアンソロジーを平賀、篠原、秋田ほか一名で編集し、平成２７年３月、オランダの John Benjamins 出版社より上梓した（図書欄参照）。

以下、３つの研究項目ごとに本研究組織メンバーによって行った個別研究の成果をまとめる。

(1) 音象徴

代表者と協力者（川原）の共同研究により、これまでの音象徴研究を拡張し、言語音と知覚的イメージの間の「音」象徴的な関連性だけでなく、言語音を直接含まない領域にも象徴関係が見出されるかどうかについて実験研究を行った。その結果、{言語音、視覚イメージ、パーソナリティー} という三項目、さらに {言語音、視覚イメージ、感情} という三項目がそれぞれ三つ巴のイメージ関連をもつことを実証した。この関連には、abruptness（突然の変化）が共通する動機づけとして関わっている可能性が示唆された。

また、かねてより研究していた「サイズ」のイメージの音象徴について、複数の言語で同一実験を行った。子音の有声性、母音の後舌性、母音の開口度それぞれが複数の言語で通言語的に共通の音象徴現象を見せることを明らかにした。

３年間の研究期間内に、代表者は本課題の項目をさらに拡張し、スポーツにおけるオノマトペや音象徴的言語の機能の研究にも着手した。また類像性が関与する他の現象である概念メタファーについても研究を進め、時間概念および感情表現について、視覚的イメージと概念的イメージがメタファー的写像関係をもつことを明らかにした。このように、当初の予定よりも広範囲に音象徴の研究を進めた。

(2) オノマトペ

分担者の秋田が担当し、これまでの国内のオノマトペ研究になかった新たな研究成果を得た。日本語のオノマトペを出発点として、アフリカ・アジア・アマゾンの言語、さらには手話やアニメの効果音との対照により、音声言語を越えた類像性の語彙的・文法的特徴づけを試みた。第１に、オノマトペ文法のパラ言語的側面に注目した。具体的には、日本語の視聴覚コーパスを用いて、例えば副詞的なオノマトペ（例：グルグルと回る）が動詞的なオノマトペ（例：グルグルする）よりも韻律的に際立ちやすく、ジェスチャーが伴いやすいことを定量的に示した。第２に、空間移動表現を例に、声で物事を真似る「聴覚的類像」としてのオノマトペと、手や顔で物事を真似る「視覚的類像」としての手話における共通点と相違点を探った。両者は、「類像」として態度・感情などの抽象的情報は模倣しにくい一方、オノマトペにとっての形状や、手話にとっての音のように、一方にのみ模倣しにくい情報があることを指摘した。第３に、日米アニメの比較から、日本のアニメに用いられる非言語的な効果音が、日本語オノマトペの繊細な描写力を反映し、様々な事象を描き分けていることを示した。

(3) 文学にみられる類像性

分担者の平賀と、その協力者（山田）を中心に、文学作品にみられる類像性を、具体的な作品に着目して分析した。取り上げたのは石牟礼道子の文学的散文における会話の場面である。自分以外のコミュニケーション参与者の言葉を「反復」するというふるまいが頻出することに着目し、そうした類像的な言語行為が石牟礼文学においてどのような「意味」をもつと解釈できるかを考察した。「コミュニケーション」における「反復」の機能に目を向けたロマン・ヤコブソンらの知見を援用しテクスト分析を行った結果、石牟礼のテクストでは、反復という言語行為が (1)「他者」とのコミュニケーションを成立させる要となっている場合があること、(2) 理解しえない「他者」の言葉を受けとめたことを示すふるまいとして機能していることが明らかになった。このケースのように、文学において類像性は独自の機能をもつ構造として表現面に現れる。

(4) まとめ

以上のように、言語の類像性は、音象徴のような物理的、生理的な音声の側面から、文学の表現形式のようなレベルにまで及ぶ広範囲の現象であることを全体として捉える成果を、我々の３項目の課題への取り組みによって改めて明らかにした。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 11 件）

1) Shinohara, Kazuko & Shigeto Kawahara. 2016. A cross-linguistic study of sound symbolism: The images of size. BLS 36: 396-410.（査読無）

2) 篠原和子. 2015. オノマトペと認知科学−実験をもちいた音象徴の基礎研究−. 日本語学 34-11: 45-54.（査読無）

3) 佐治伸郎・秋田喜美・カテリナ＝カンタルチス・喜多壮太郎・今井むつみ. 2015. 音象徴語に潜む言語普遍性と個別性：産出実験からのアプローチ. 日本認知言語学会論文集 15: 301-308.（査読無）

4) Akita, Kimi. 2015. Sound Symbolism. Handbook of Pragmatics. 2015: 1-24.

5) 山田悠介. 2015. 『反復』というふるまい ー石牟礼道子の言葉ー. 共生学 10: 107-126. （査読無）

6) Shinohara, Kazuko, & Shigeto Kawahara. 2013. The sound symbolic nature of Japanese maid names. Proceeding of the 13th meeting of Japanese Cognitive Linguistics Association. 183-193.（査読無）

7) Hiraga, Masako. & Haj Ross. 2013. The Basho code: Metaphor and diagram in two haiku about silence. Iconic Investigations 2013: 25-42.（査読無）

〔学会発表〕（計 21 件）

1) Akita, Kimi. 2015.9.21. Ideophones and the iconicity of motion event descriptions. The 4th International Symposium on Signed and Spoken Language Linguistics. 国立民族博物館（大阪府・吹田市）.

2) Yamauchi, Naoto, Kazuko Shinohara, & Hideyuki Tanaka. 2015.8.9. What mimetic words do athletic coaches prefer to verbally instruct sports skills? A phonetic analysis of sports onomatopoeia. The 20th Annual Conference of the East Asian Sport and Exercise Science Society. 東京農工大学（東京都・小金井市）.

3) Akita, Kimi. 2015.3.27. Sound effect symbolism crosslinguistically: The case of Japanese and American animated cartoons. The 10th International Symposium on Iconicity in Language and Literature. Tubingen University, (Tubingen, Germany).

4) Naoki Kiyama & Kimi Akita. 2015.2.7. Gradability and mimetic verbs in Japanese: A frame-semantic account. The 41st Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society. University of California, Berkeley, (California, USA).

5) Shinohara, Kazuko, & Shigeto Kawahara. 2014.7.31. Iconic trans-modal symbolism: case studies on personalities and emotions. The 5th UK Cognitive Linguistics Conference. Lancaster University (Lancaster, UK).

6) 秋田喜美. 2014.7.19. オノマトペの言語的統合性. 日本フランス語学会フランス語談話会. 明治学院大学白金キャンパス（東京都・港区）.

7) 篠原和子. 2014.7.19. 音象徴にみる音と意味の動機づけ. 日本フランス語学会フランス語談話会. 明治学院大学白金キャンパス（東京都・港区）.

8) 篠原和子. 2014.6.17. 音象徴にみることばの意味と形の距離. 日本学術会議「心と脳」委員会. 日本学術会議（東京都・港区）.

9) 篠原和子・川原繁人・本間武蔵. 2014.5.13. 「身体としての言語」第 28 回日本人工知能学会. 愛媛県県民文化会館（愛媛県・松山市）.

10) Akita, Kimi. 2014.5.2. Structuring sensory imagery: Ideophones across languages & cultures. Rochester University (New York, USA).

11) Shinohara, Kazuko, & Shigeto Kawayara. 2013.12.13. Iconic inferences about personalities and emotions: from sounds and shapes. Sound Symbolism Workshop. Keio University (Minatoku, Tokyo).

12) 篠原和子・川原繁人. 2013.6.6.「音象徴からみる言葉の身体性」第 27 回日本人工知能学会. 富山国際会議場（富山県・富山市）.

13) Shinohara, Kazuko, Shigeto Kawayara, & Joseph Grady. 2013.5.4. Iconicity in names and personality. The 9th International Symposium on Iconicity in Language and Literature. Rikkyo University, (Toshimaku, Tokyo).

〔図書〕（計 3 件）

1) 篠原和子・宇野良子（編著）『オノマトペ研究の射程：近づく音と意味』ひつじ書房. 403 (1-57, 101-115, 117-132, 245-260, 333-364).

2) Hiraga, Masako, William J. Herlofsky, Kazuko Shinohara & Kimi Akita (Eds.) 2015. Iconicity: East meets West. Amsterdam: John Benjamins. 279 (1-9, 57-69, 109-123).

3) Shinohara, Kazuko. "UP/DOWN time in Japanese & English. 2013.5. In Vaishna Narang (ed.) Issues in Learning Theories and Pedagogical Practices. New Delhi: Orient Blackswan, 572 (pp. 319-339).

〔その他〕

ホームページ等

篠原和子：
http://web.tuat.ac.jp/~shino/Home.html

平賀正子：
http://rukkyo.ne.jp/web/hiraga/ja.html

秋田喜美：
https://sites.google.com/site/akitambo/jpn

６．研究組織

(1)研究代表者

篠原和子（SHINOHARA, Kazuko）
東京農工大学・大学院工学研究院・教授
研究者番号：00313304

(2)研究分担者

平賀正子（HIRAGA, Masako）
立教大学・大学院異文化コミュニケーション研究科・教授
研究者番号：90199050

研究分担者

秋田喜美（AKITA, Kimi）
名古屋大学・大学院国際言語文化研究科・准教授
研究者番号：20624208

(3) 連携研究者

なし

(4)研究協力者

川原繁人（KAWAHARA, Shigeto）
慶應義塾大学・言語文化研究所・准教授
研究者番号：80718792

研究協力者
宇野良子（UNO, Ryouko）
東京農工大学・大学院工学研究院・准教授
研究者番号：40396833

研究協力者
山田悠介（YAMADA, Yusuke）
立教大学・大学院異文化コミュニケーション研究科・博士後期課程
研究者番号：なし